

石垣島川平の女性神役

—その就任・祈願・神との関わり方をめぐって—

文化科学研究科・日本歴史研究専攻 澤井 真代

Priestesses in Kabira, Ishigakijima:

Their Inauguration, Manners of prayer, and Concept of gods

Mayo, SAWAI

(The Graduate University for Advanced Studies, School of Cultural and Social Studies, Department of Japanese History)

Key words;

priestess-Tsukasa-, Kabira, Ishigakijima, choosing the successor by lot, ritual invocation, concept of gods

In the study of Ryukyuan folk religion, the issue of the priestess-Noro, Tsukasa-, who does mainly the ritual of community, is one of the topics having mentioned frequently. But in the previous studies, they have argued some of the limited topics about priestess. Contrary to this, I consider it is necessary to focus on the religious life of priestess in more phases. From this point of view, in this paper, I would like to describe by my research three topics about priestess-Tsukasa- of Kabira, Ishigakijima, one of the southern Ryukyuan islands.

- 1) The process of the inauguration, especially the lot, the way to choose the successor. In Kabira, the way of lot was brought in after the World War II. In former times, the successor had been decided by blood. In the previous studies, the lot is looked upon as a rational way. But actually, for the priestesses themselves, the scene of the lot is far from rationalism, rather the scene where the power of gods operates. They tell me about the mysterious incident during the lot.
- 2) The way of praying at the ritual ceremony, especially about the ritual invocations, which characterize the being of priestesses. In Kabira, knowledge about ritual invocation is limited strictly to the priestesses, with the way of chanting and transmission. I also could not grasp the texts, but by some hints I have got, it seems that they have concrete content about rich harvest of agricultural products and health of community's member. About the rule of chanting, it is noticed that even when the plural priestesses chant separately, they intend strongly the invocation to unify.
- 3) Concept of gods. As before, the priestess is often looked upon as the prayer who merely pray to gods. But recently, it is reported from some villages that the priestess perceive gods in various way. Kabira's case also tells us priestesses perceive gods. It was previously reported that another village's priestess perceive gods in human shape. To compare with this, the feature of Kabira's case is that priestess sense the gods by sound and touch.

I have described the part of the religious life of the priestesses in Kabira. Hereafter, I would like to extend the range of description and advance in comparative study.

石垣島川平の女性神役

—その就任・祈願・神との関わり方をめぐって—

文化科学研究科・日本歴史研究専攻 澤井 真代

はじめに

琉球諸島の南西端に位置する八重山の島々の1つ、石垣島の川平集落では、農作物の豊作や住民の健康を祈願する儀礼が1年に26回行なわれる。人々はそれぞれの立場から儀礼に参加しているのだが、ここでは集落において祈願の役目を中心的に担う女性神役「ツカサ（司）」に着目し、神役の選出、祈願のあり方、ツカサが儀礼において果たす役割の中でも軸となる唱え言「カンフツ（神口）」などについて、国内フィールドワーク派遣事業による調査（2006年7月10-14日、11月10-15日）の成果を主に報告する¹。

従来、ツカサやノロなど共同体の儀礼に携わる神役については、継承原理など社会制度の面から考察されることが多かった。また、ノロ・ツカサと、ユタなど個人的な儀礼に携わる神役とは別個に考察されていた。しかし1980年代よりノロ・ツカサとユタの「両者を視野に含めたトータルな考察」（渋谷1992:363）が行なわれるようになると、ノロ・ツカサについての研究でもユタについての研究でとられていた、神役個人に接近する方法による考察がされるようになった。ただ、そこでのノロ・ツカサについての指摘は、すでにシャーマニズム論の観点から重要性が見出されていたユタの生活史や成巫過程との共通性、特に憑依現象に関するものが多かったと言えよう。すなわち、ノロ・ツカサ個人に接近する視点により、神役に就く人にある程度共通する生活史や、儀礼における制度の変化の動態など、重要な問題が明らかにされたのであるが、そこでのノロ・ツカサに関する指摘は、憑依やユタとの関わりに収斂するものが多かった。今後、ノロ・ツカサを考察対象とするうえでは、村落の祭祀儀礼に深く関わる生活をより多面的に取り上げる必要があるのではないかと考えるのである。

以上のような琉球諸島の女性神役研究の状況とはやや異なり、川平のツカサに接近した先行研究では、憑依やユタとの関わりという問題に限らず、儀礼において重い役割を持つ個人としてのツカサの、生活の内外が多彩に描かれている（保坂1999、前原2002）。そうした研究が川平を対象として行なわれる理由の1つに、川平における儀礼の制度的枠組みが比較的良好に維持されていることがあるであろう。

本稿も、川平のツカサについていくつかの側面からの記述を試みるが、筆者は特にツカサが管掌する唱え言に着目している。琉球諸島の女性神役による歌や唱え言についての踏み込んだ考察には、内田（2000）、高梨（1997）、渡邊（2004）などがあるが、まだ多いとはいえない。しかし、地域ごとに、その習得過程や発し方、聞かれ方が様々であり、しかも日常のことばとは異なる様々な制約や約束がまつわるものであることが実践のレベルで明らかにされつつある。それらの先行研究で報告される事例との比較考察を視野に入れつつ、まずは本稿で、川平のツカサの祈りとことばの実際について報告したい。

1. ツカサの選出

川平のツカサは任期制ではなく、1度就任すると高齢などによる儀礼遂行の困難といった理由がない限り退任することはない。また、子、丑、酉、寅などの「神年」とされる年に限り、交代が認められる。最近では1996年と2002年に神役の交代があり、新しいツカサが選出された。

交代の流れについて、2002年を例にとると、まず前任者の在任中に後任者を決める神籤「フカツ」が行なわれ、その4ヵ月後に前任者が神役を降りる儀式「カンイトマネガイ（神暇願い）」が行なわれている。その3日後、後任者の就任儀礼「ヤマダキ」が行なわれ、以後、後任者がツカサとして各儀礼の祈願をすることになる。

以上の過程のどれもがツカサにとっては一生に1度の経験であり、特に3日間籠って唱え言を教え込まれるヤマダキは特別な辛いものとして語られることが多いのだが²、ここではツカサを選出するフカツに絞って述べたい。琉球諸島においては、籤による神役選出を行なう地域ごとに方法も少しずつ異なるのだが（大越1986:164-176）、川平のフカツは、何人かの候補者が自分でおみくじを引き、当たった人がツカサになるという方法である。くじを引く人数分の白い紙が用意され、その中の1つに「神」という字が書かれる。この字が書かれたくじを2回引いた人が、ツカサになる。

フカツが行なわれる場所は「オン（御嶽）」、「オミヤ（お宮）」などと呼ばれる集落の拝所である。川平にはオンが5つあり、そのうちの4つに1人ずつツカサが就くことになっている。交代するツカサのオンにおいて、フカツは行なわれる。候補者達が円形に座り、くじを載せた盆を持つ1人の現役ツカサが1巡目は右回り、2巡目は左回り、と巡って2回当たりくじを引く人が出るまで繰り返す。

ツカサの選任にあたり、フカツの方法が取られるようになったのは第2次世界大戦後であるという（櫻井1987:246、保坂1999:209）。それまでは、各オンの創建に関わったという伝承をもつ家の血筋を引く長女がツカサに就任していた。血筋による継承からフカツによる選出への変化は、近代化に伴う神役の継承方法の合理化と見なされることが多く、しばしば神くじ自体も合理的な方法と見なされる（cf. 櫻井1987:246）。しかし、フカツは合理性の面からのみ捉えられるべきではない。実際にくじを引いた女性によれば、フカツの場は合理的に説明のつく事柄だけで成り立ってはいないことが分かるのである。例えば、1996年に就任したMさんは次のように話す³。

わたしは2回目と4回目にあたった。4回目は、折りたたんである紙の上から、「神」の字がうかびあがって見えて、恐ろしくなった。サーっと血の気が引いた。けれど、それを引かなければならないと、周りからの圧力を感じた。

（2006年7月11日、Mさんのご自宅にて）

また2002年に就任したKさん（1937年生）によると、フカツの際、同席のツカサ達にのみ見える当たりくじがあったという。

みんなが取ってから、同時に開ける。わたしにあたる。「神」と書かれていた。2回目は左回りに。どっかのおばさんが当たった。3回目は右回りに。このとき、カラクジ。（候補者）8人には何も見えない。しかし3人のツカサ⁴は、「そんなことはない、ちゃんと入れてあるから見せてみー」と言い、ツカサが見ると、ちゃんとある。カミシ（神司）には見える。しかし（候補者

達が) 裏も表も返してみても、ない。4回目はどっかのおばさん。5回目、わたしがあたった。2回当たったので決まり。

(2006年7月11日、Kさんのご実家にて)

Kさんはまた、自分がフカツに当たった時のことを次のように話した。

当たったときは、泣いた。でも、当たっても断ったら、子や孫まで悪いことがおこる。昔、士族の方が、士族だからとツカサを断ったら、ずっと悪いことがあって家も絶えた。神様から認めてもらったんだから、徳を与えてもらったんだから、断ったら悪いことがあるから。

(2006年7月11日、Kさんのご実家にて)

佐々木は宮古島の神役選出における抽籤制を検討し、神くじの結果は「神の意志と考える事から拒否ができない」(佐々木1980:177)と捉えられると述べている。これを受けた仲里も、石垣島白保での調査に基づき、「白保のツカサ達は『ウカジ』という神籤の選定により、カミから選ばれたというツカサとしての『生まれ』を意識させられ」(仲里2002:38)と述べている。川平のKさんも、「当たったときは、泣いた」が、「神様から認めてもらったんだから」とフカツの結果をカミの意志として受け入れたことを語っている。

川平においても、多大な負担を伴うツカサの役を決めるフカツの場は、カミの意志がはたらく場とされていると言ってよいだろう。そのような点に、上記のような神秘的な経験があったと語られる余地があるのかもしれない。

2. 儀礼での祈願

①祈願の手順

ツカサに選出された人は、就任儀礼を経て新しくツカサとして儀礼での祈願を行なっていく。川平の年間26回の儀礼は規模が様々であり、集落内の多くの人が集まるものもあれば、ツカサと少数の男性神役だけで行なうものもある。また、ツカサのみで行ない、他の人はその姿を見てはいけないと集落内に周知されている儀礼過程もあれば、ツカサ1人ずつが行なう、集落のほとんどの人がその存在を認知しないような儀礼もある。1つの儀礼の中に、以上の過程が複数含まれる場合もある。これらを通し、ツカサによる祈願の方法にはどの儀礼にも共通する以下のような手順がある。

オンの奥の「ウブ」と呼ばれる、ツカサと一部の女性のみが入ることのできる石垣で仕切られた空間において、大部分の祈願は行なわれる。ツカサはまず、各オンにおけるカミの名前「ミョーズ(名字)」を唱え、各オンが管轄する土地の名「パカーラ」を唱える。唱え言は、正座し、両手を水平にして円を描くようにすり合わせながら行なう。次に香を焚き、これから祈る内容を伝える祈願をする。続いて供物を少しずつ取り分けて香炉の前に供え、香を焚き、その祈願における中心的な内容の唱え言を唱える。この時は腰をかがめ、合わせた両手で地面を突きながら唱える。終わると、髪に米粒を入れる。続いて、カミに祈願が通じたかどうかを見る米占いを行なう。通じたと出ると、髪に米粒を入れ、香を焚き、最後の挨拶にあたる祈願を行なう⁵。

以上の一連の手順を、ある儀礼では1回、また別の儀礼では2回、3回、と行なう。例えば、稲の取

穫感謝祭である「豊年祭」という儀礼では、当日の午後、各オンに集まった氏子達の前でツカサは先の一連の手順を3回行なう。1回目はカミに川平の人口を報告し、各家から新米が入ってきたことを述べ、あらかじめ各オンに分配された米を「神上納」^{カンジョウノウ}として上げる。2回目の祈願は「フバナアギ」と言い、氏子達が当日持ち寄ったおもちとお米をカミに上げる祈願である。3回目「タティウサイ（タティニガイとも）」では、来年もまた米が豊作になるようカミにお願いする⁶。

②唱え言の方法・目的と声の大きさ

このように、儀礼の目的に沿った祈願を、ツカサは主に唱え言によって行なう。ツカサの唱え言を、ツカサは「カンフツ（神口）」と言う⁷。カンフツは、ツカサ以外の人々が聞く機会が極めて限られていることばである。儀礼の場で唱えられるカンフツの大部分は、ツカサのみが入ることのできるオンの奥のウブにおいて唱えられ、他の人が参加していたとしてもカンフツを唱えるツカサとは距離がある。また年に数回、カンフツを唱えるツカサの直ぐ傍に他の男性・女性神役が座ることがあるが、その時も、ツカサを先頭に皆で同じ方向を向いて座るうえ、ツカサはとても小さい声でカンフツを唱えるため、やはりほとんど他の人には聞こえない。

カンフツを唱える声の大きさについて、Mさんは次のように言う。

1人でウブに入るときは小さい声で唱える。自分と神様だけだから。

(2006年7月11日、Mさんのご自宅にて)

また、儀礼によっては4人のツカサが1つのウブに入って祈願を行なうことがある。その時は、前後左右に座るツカサ同士、互いに聞こえるくらいの声で唱えるという⁸。あるいは次のような説明もある。Kさんの前任者のSさん（1925年生、1950-2002年在任）は、ウブに4人で入る時も、カンフツを唱える声は互いに聞こえなかったが、どこを唱えているかは互いに分かる、とのことだった⁹。

習得過程にあってカンフツを唱える時も、自分とカミ以外を意識して唱える声の大きさになる。

ツカサになりたての頃、最初の2、3回は、前任者と一緒にウブに入った。前任者にも聞こえるように唱えて、次はこう、次はこう、と教えてもらった。

(2006年7月11日、Mさん談、ご自宅にて)

なお、就任儀礼のヤマダキでは、新任者は前任者や他のツカサから、カンフツやミョーズ、パカーラを3日3晩集中的に教えられる。この時、カンフツを筆記してはならず、すべて口から口に伝習する。ヤマダキを行なう場にはツカサや、新任のツカサが籠る部屋に水などを運び入れる家族のみしか近付くことができず、カンフツがツカサ以外の人に聞かれる余地はここにもない。

就任儀礼や着任後直ぐの儀礼における前任者からの指導とは別に、ツカサ同士でカンフツを唱え合わせる場がある。唱え合わせることを「ツラス」と言い、ツカサ達のこの集まりは「カンフツツラシ」と言われる。カンフツツラシについて、Mさんは次のように言う。

4人でツラスときも、互いに聞こえるように、少し大きい声で唱える。行事の3日前の朝に、スーダイが各ツカサにシサル。その日の夕にツラス。これは、豊年祭、結願祭、節祭は、5日前。

(2006年7月11日、Mさんのご自宅にて)

各儀礼の3日前か5日前の早朝、各ツカサの家に男性神役が1人ずつ赴き、来たる儀礼での祈願を依頼する。これを「シサル」また「ヒサル」と言う。その日の夜、ツカサ達4人は集まり、来たる儀礼でのカンフツを唱え合わせる。この時は互いに聞こえる程の声の大きさである。

以上よりカンフツは、習得や唱え合わせなどの目的がある時は隣同士聞こえる位の大きさの声で唱えられるが、儀礼の場では基本的にほとんど自分にのみ聞こえるほどの声で唱えられる。さらに他の人から離れた場所で唱えられることとも相俟って、カンフツはツカサ以外の人に聞かれることのほとんど無いことばであると言える。

なお、カンフツをツラスことの意味合いについてふれておきたい。Iさん（1940年生、1969年就任）は次のように言う。

4人で一言一言全部合わせないと、めいめいのオミヤ（オン）で言えない。バラバラではいけない。

（2006年11月8日、Iさんのご自宅にて）

4人のツカサは、各自が担当するオンで別々にカンフツを唱える時であってもバラバラのカンフツを唱えてはならず、カンフツツラシで一言一句を合わせてから儀礼に臨むという。このようにカンフツは、ツカサ以外の人にはほとんど知られないことばであるが、ツカサの役に就く人の中では統一がはかられており、定まった内容と形式をもつものであると考えられる。

③カンフツの形式と内容

カンフツの詞章そのものはツカサ以外には教えられないため、筆者も把握できないが、いくつかの手がかりから、どのような形式・内容をもつものか検討しておきたい。まず、ことばの形式についてツカサが語ることを挙げる。

ずーっとむかしの、川平村が建った頃のことば。難しい。

（2006年7月11日、Iさん談、ご自宅にて）

カンフツのクチ（口）の方言は、しゃべっている方言と全然違う。

（2006年7月11日、Kさん談、ご実家にて）

ツカサはしばしば、カンフツの詞章は昔ながらの川平方言でできており、中には意味の分からない語も含まれると話す。また、敬語も多く含まれるのでなおさら難しいという。それゆえ、意味の分からないことばを初めて一度にたくさん覚えなければならぬヤマダキは大変辛いものだと語られることが多い。

次に内容について、先に述べた豊年祭における祈願内容からも伺えるように、カンフツはかなり具体的な内容をよみ込んだものようである。カンフツの具体性を示す例として、もういくつかツカサによるカンフツについての説明を挙げておく。

カンフツは「道理上」になっており、順序がある。季節に合わせて道理にかなっている。農作業の手順に沿った文句である。このように意味が通るので、唱えられる。農作物についての祈

願ではない「十月祭」や「九月九日」、「旧正月」、「火の神の願い」は住民の健康祈願で、「道理上」ではないから難しい。

(2001年8月12日、Sさん談、ご自宅にて)

川平の儀礼には、稲その他の農作物について、種まきから収穫までの段階ごとに分けて行なわれ全体で一連になっている儀礼と、1回で完結する健康祈願がある。Sさんによれば、農作物についての一連の儀礼は季節ごとの農作業の手順に沿った祈願内容なので（これが「道理上」と言われている）、カンフツも覚えやすいが、1回完結型の健康祈願のカンフツは覚えにくいという。これは、農作業というカンフツ以外の経験に照らすことのできるものは覚えやすく、一方で他の経験などに連ねて考えることのできない健康祈願のカンフツは、それそのものを覚えるしかないのが難しい、ということだろうか。しかしいずれにしても、農作物のつながらない成長と豊作、住民の健康、といった儀礼目的に沿う具体的な内容のカンフツが唱えられていることが分かる。

もう1つ、「麦粟の種子出し」「麦豆の初上げ」という儀礼におけるカンフツの具体性について、Sさんの説明を挙げる¹⁰。川平の麦、粟、豆は、Sさんがツカサになった1950年には作られており、2つの儀礼では農作業に連動するカンフツも唱えていた。しかし、麦、粟、豆はそれから5、6年で作られなくなり、儀礼ではそれまでのカンフツも唱えなくなったという。しかし、儀礼自体を省くことはなく、日取りして行ない続けた。それは「昔からずっと続いてきたものを自分の代で途絶えさせるのがいやだったから」という理由による¹¹。カンフツでは、「麦、粟、豆は鳥がとってしまうから今は作っていません、山に囲まれた川平ですから鳥も多い、いつかはまた作らせてください」と、これらの作物を作っていない理由や成り行きを言っているという。現実に対応した具体的な内容のカンフツであると言えよう。この新しいカンフツの形式については、「ツカサ同士でツラス時に、他のカンフツを参考に敬語を取り入れて作った」ということである。

このようにカンフツは「ずーっとむかしの、川平村が建った頃のことば」でできているとされ、ツカサからツカサへそのまま伝承され、ツカサ同士の「カンフツツラシ」によっても統一が保たれようとする一方、現実に対応するために新しく作られることもあるのである。

以上でみた限り、川平のカンフツは、農作物の生育や豊作の祈願・感謝や、住民の健康祈願、また、儀礼でその生育を祈願すべき作物を作っていないことへの説明を言うものである。現段階での手がかりのみから考えると、川平のカンフツは、人々の現実の生活と関わる儀礼の祈願目的を表現する（あるいは現実と対応していないことを説明する）という意味で、具体性の高い内容をもつものであると言えよう。

なお、「具体性が高い」ということは、カンフツの内容に限らず、川平の儀礼において取られる行為にも言えるようである。例えば、稲の刈り取りを始めることを神に報告する儀礼（スクマ願い）では、かつて使われていた農道を整備することが儀礼過程の1つに組み込まれている。一方、宮古諸島においては、集落の創世神話をなぞる儀礼（松井1986）や、集落の創成や歴史を歌う女性神役の神歌（内田2000）など、抽象性をもつ儀礼過程や儀礼の場における歌の事例が報告されている。今後、川平と、琉球諸島における他集落との比較を視野に入れ、歌・唱え言などのことばによる表現や儀礼の性格についての検討を進めたい。

3. カミの感じ方

①出来事にみるカミ

ツカサは繰り返される儀礼において、カンフツを唱え祈願を行なうことを主な職掌とする。次に、祈願を行なう存在としてのツカサが、カミをどのような場面でどのように感じるのか、いくつかの例を取り上げたい。まず、ツカサ就任前に体の具合が何度も悪化した経験を持つKさんが語ることを挙げる。

ずっと体調が悪かった。それで（結婚して間もなく）母がユタに連れていった。すると「カミシ（神司）になるべきだよー、なぜ道を開けない？」と言われた。あのときも、（カミシになる、ということが）できたんですよ。

オミヤ（お宮。オンのこと）に行き、（祈願などを）するようになったら、熱もぴたっととまった。それでティナラビ（ツカサの補佐をする女性神役）になり、すると健康になった。まだばあちゃんがいたから正式にはやらなかったけれど。その後、ばあちゃんが死んだ。

ティナラビになる人は、父方のおばあさんもティナラビ。わたしも父方の祖母がティナラビだった。わたしなんかはこのばあちゃんの血筋で、小さいときから、ばあちゃんの後継ぎする人、とオミヤに連れて行かれた。おかつぱして、オミヤのごちそうを楽しみに、喜んで行っていた。

ばあちゃんの死後も、ばあちゃんの香炉を守っていた（この頃も体調が悪かった。ツカサになる10年程前のことである）。しかし、ユタから、（香炉を）自分のものにしなさい、替えなさい、と言われた。それで、Sさん（当時のツカサ。Kさんの前任者）に新しく作ってもらった。そうしたら、その日から、体がすーっと軽くなった。元気になった。神様のおかげ、と感謝して、正月と、九月九日と、豊年祭と、結願祭にはお宮に行った。

ツカサになる前も、具合が悪くなった。迷信でない、自分にあたってみて分かる。食べられない。吐いてしまう。やせて、病院に行った。ユタヌヤー、ユタにもみてもらった。

Sさんがやめて自分が（ツカサを）やりはじめてからは、大変元気。神様のおかげだと思って感謝している。

（2006年7月11日、Kさん談、ご実家にて）

神役に就く前、原因のよく分からない体調不良に陥ること、就任後は体調が良くなること、神役就任に関しユタの判断を仰ぐことなど、2002年に川平でツカサに就任したKさんが語られたことは、琉球諸島の民俗宗教研究において各地から数多く報告されてきたノロ・ツカサの生活史に共通する事柄を多く含む。川平では他に2人のツカサが、神役就任前に体調が悪くなり、就任後は元気になったと語られる¹²。Kさんは就任後に元気になったことを「神様のおかげ」と言っているが、悪化を含めた体調の経緯をカミとの関わりで捉えていることが伺われる。

就任後に起こったその他の出来事についても、良いことに関しては「神様のおかげ」と語られることが多い。それは個人的な出来事にも言われるが、集落の儀礼に関することでも言われる。たとえば、ツカサは儀礼が行なわれる日の天気について言及することが多いが、儀礼当日天気に恵まれたことについてIさんは次のように語った。

昨日は天気が心配で眠れなかった。でも神様のおかげで雨は降らず風が吹いて涼しくて良い

日になった。

(2004年7月2日、豊年祭の途中道を歩きながら)

この時は台風が近付いており、終日戸外で行なう豊年祭への影響が心配されたが、雨が降らず天気が持ちこたえたことについて、Iさんは安堵して語ったのである。

また、米の初穂をカミに上げる「スクマ」儀礼が例年、満月でかつ晴れた日と重なることについては次のように語られた。

スクマは日取りが難しい。しかし何の考えなしに日取りするのに、毎年、お月様の日に当たる。(自分が) ツカサながら不思議。これは、農民が夜遅くまで働いても、お月様で明るいように。

(2004年6月5日、Iさん談、スクマ儀礼を行なうオンにて)

スクマ儀礼でカミに初穂を上げ、米の収穫を始めることを報告すると、本格的な刈り入れが始まり、米作に携わる人は忙しくなり、月の光にたよって夜まで働くと言われることが、この談話の背景にある。

農作業にも、戸外で行なわれることがほとんどの儀礼にも、天候の影響は大きい。しかし天候は人がどうしようもできないことであり、ツカサは気にかけるが、良い天候に恵まれると、カミや、人智を超えた作用と関わらせて考え、感謝する。

この事例はツカサがカミを感じる局面の1つと言えるが、ここからはまた、集落の儀礼が支障なく執り行なわれるかどうかについて、ツカサがほとんど自分のことと同様に心を砕いていることが伺われる。それは、自分が担当するオンについて、ある時は「自分のオミヤに入ると落ち着く」と言い、また別の時は「部落のオミヤだから自分勝手なことはできない」と言うこととも関係があろう。

②肌身を感じるカミ

最後に、ツカサがカミを感じる時についての、五感による表現を挙げたい。

(ツカサ就任前) ずっと体調が悪かった。「早くこの道を開きなさい」と、神の声がよく聞こえた。カミシ(神司)になってからも、お宮に行くと、何かピシーッと神の声が聞こえることがある。

(2006年7月11日、Iさん談、ご自宅にて)

(旧暦の) 7月はオミヤでのニガイ(願い)がない。そういう時、少し行かない間にオミヤが荒れたり、部外者が入ったり、誰かが勝手なことを祈ったりすると、知らせがくる。感じる。パーッと、頭の後から肩のあたりにかけて。それで家の用事を済ませて行ってみると、知らせの通りにオミヤが荒れている。

(2006年11月8日、Iさん談、ご自宅にて)

おみくじ(神籤、フカツ)の朝、露天風呂に入って、上がり、長女に乳をあげていた時、毛が立って寒気がパーツとした。

(2001年8月12日、Sさん談、ご自宅にて)

Iさんが聞いた「早くこの道を開きなさい」という表現は、Kさんがユタから聞いた「なぜ道を開けない？」という表現と似ている。実はIさんも、ツカサになる前の体調不良時に沖縄本島のユタを訪ねている。そこで「道を開く」という表現にふれた可能性があり、それが、就任前のIさんが聞いた声に影響しているのかもしれない。

それ以外の例では、「ピシーッ」「パーッ」など、カミはことばというよりは音や触覚で感じられている。これに似た事例を他集落にあたってみると、沖縄本島北部での年中儀礼の1つで、カミが女性神役の体に「ピリッとした電気的な衝動」(渋谷1990:38)として感じられるという報告がある。

なお、ツカサはよく「神様の姿は見えないけれど、いらっしゃることは分かる」と話す。川平ではカミの姿形は観念されないようだが、沖縄本島北部の女性神役には「ある程度人格化された神を意識」する人が多く、中には「明確な人物像をもつ神を思い描く」人もいるということである(高梨1989:45)。

以上からは、川平のツカサはカミをその姿やことばによって感じるというよりは、音や肌への感覚によって感じると語られることが注目すべきものと考えられるが、この点は今後さらに調査・検討が必要である。

おわりに

石垣島川平の女性神役「ツカサ」は、どのように選出され、儀礼をどのように行なうのか、儀礼での唱え言「カンフツ」はどのようなことばか、ツカサはカミをどのような局面で感じると語るのか、といった問題の一部分を具体的に記述した。これまでに、川平においてツカサ以外の神役や神役ではない人に着目した調査も行なっており、それらもふまえて、今後は儀礼をめぐる川平の人々がどのように考え、行動しているのか、明らかにしたい。この時、儀礼の場で発せられることばを1つの着眼点とする。以上を、他地域の事例や理論的問題と有機的に関連付けて考察することも今後の課題である。

¹ なお、筆者は2000年から断続的に川平での調査を行っており、本稿にはこれまでの調査で得られたことも随時入れている。

² ツカサの就任過程全般については別の機会に検討したい。また、工藤ゼミナール報告書編集委員会[編](1991)や前原(2002:56-60)には、川平のツカサが自らの就任過程について語ったことが記されている。

³ 以下、ツカサや元ツカサが話されたことに基づく談話文を随時挙げる。この談話文は、話された当時のニュアンスが伝わるように不完全ながら努めたものであるが、話されたことをそのまま書いたものではなく、筆者による再構成がなされている。具体的には、話された順序を入れ替えることによって筆者が理解した事柄については、談話文でも入れ替えて提示した。また、語尾なども一部簡潔にした。なお、談話文中の括弧内は筆者による補足である。

⁴ ファツには前任者を含む川平の4人のツカサが立ち会うことになっているが、1人のツカサが入院により欠席したため、この時は前任者を含む3人が立ち会った。

⁵ なお、拙稿において、ツカサの他に男性神役「スーダイ」が参加する儀礼について、ツカサとスーダイの祈願方法を記録している(澤井2006:77-80)。

⁶ 1926年生で1950-2002年までツカサをつとめたSさんの説明(2004年7月1日、Sさんのご自宅にて)と、1940年生で1969年就任のツカサIさんの説明(2006年7月13日、Iさんのご自宅にて)による。

⁷ 『南島歌謡大成 IV八重山篇』(外間・宮良1979)においては、ツカサによる唱え言は「ニガイフチ」に分類されているが、川平のツカサ達自身は唱え言のことを「カンフツ」と呼んでいるため、本稿ではこれに従う。

⁸ 2006年7月11日、Mさん談(ご自宅にて)。

⁹ 2001年8月12日、Sさんのご自宅にて。

¹⁰ 2004年6月4日、Sさんのご自宅にて聞いた説明。なお、前原(2002:61-2)でも「麦豆の初上げ」について、現実には麦・豆を作らなくなったが、ツカサ達は事情をカミに説明し、儀礼を継続していることが記されている。

¹¹ また2つ目の理由として「種子出しをしたら初上げをしないとおかしいので」ということも言われたが、これは先

の理由とは次元が異なる。先の理由は、現実には作っていない作物についての儀礼を行なうかどうかという問題に関わり、2つ目の理由は、儀礼と現実が対応するかどうかとは関係なく、儀礼の流れの中のみで矛盾があってはならないという意識に関わるものである。

¹² 工藤ゼミナール報告書編集委員会 [編] (1991) 参照。なお、そのうちの1人のIさんからは筆者も直接聞いている。

¹³ Sさんのこのお話は、筆者とは別の時期の調査によるものだが、前原 (2002:59) にも記されている。

参考文献

内田順子

2000 『宮古島狩俣の神歌 —その継承と創生』 思文閣出版

大越公平

1986 「村落祭祀の変容とその要因」『国立民族学博物館研究報告別冊3号 奄美・沖縄の宗教的世界』 pp.155-179,国立民族学博物館

工藤ゼミナール報告書編集委員会 [編]

1991 『1990年度 大東文化大学 文学部 日本文学科 工藤ゼミナール 神司尋書 川平民俗調査報告「節祭」に関する報告書Vol.2』 大東文化大学文学部日本文学科工藤ゼミナール

佐々木伸一

1980 「宮古島の部落祭祀 —その比較・統合に向けての序章—」『民族学研究』 45巻2号pp.160-185,日本民族学会

櫻井徳太郎

1987 「巫俗と共同体の神女組織 —沖縄シャーマニズム研究の課題—」『東アジアの民俗宗教』 (櫻井徳太郎著作集第7巻)pp.231-273,吉川弘文館

澤井真代

2006 「石垣島川平の十月祭」『奄美沖縄民間文芸学』 第6号pp.73-83,奄美沖縄民間文芸学会

渋谷研

1990 「ノロ、ユタ再考 —憑依・相剋・変容の視点から—」『常民文化』 第13号pp.33-52,成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻院生会議

同

1992 「対峙する神々 —宗教的職能者間の対立と共存をめぐる一考察—」『民族学研究』 56巻4号pp.361-384,日本民族学会

高梨一美

1989 「神に追われる女たち —沖縄の女性司祭者の就任過程の検討」大隅和雄・西口順子 [編]『巫と女神』 (シリーズ 女性と仏教4)pp.12-50,平凡社

同

1997 「南島の神女の『うた』と『ことば』」林浩平 [編]『女性文学の現在』 (東横学園女子短期大学女性文化研究所叢書 第八輯)pp.147-164,東横学園女子短期大学女性文科研究所

仲里亜希子

2002 「沖縄のシャーマン-プリースト論をめぐる一考察 —女性司祭者の就任過程を中心に—」『沖縄民俗研究』 第21号pp.31-53,沖縄民俗学会

保坂達雄

1999 「神を抱くツカサの生活」宮家隼 [編]『民俗宗教の地平』pp.205-219,春秋社

外間守善・宮良安彦 [編]

1979 『南島歌謡大成 IV八重山篇』 角川書店

前原直子

2002 「村落共同体とツカサのアイデンティティ —石垣島川平の事例—」『沖縄民俗研究』 第21号pp.55-71,沖縄民俗学会

松井健

1986 「儀礼と口承伝承」『国立民族学博物館研究報告別冊3号 奄美・沖縄の宗教的世界』pp.37-73,国立民族学博物館

渡邊欣雄

2004 「第IV部 歌謡論」『民俗知識論の課題 —沖縄の知識人類学—』pp.171-227,凱風社